
ooo after ~ 夜天の主と欲望の王 ~

a-o-w

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

o o o a f t e r ｝ 夜天の主と欲望の王

【Nコード】

N 7 3 7 6 Z

【作者名】

a - o - w

【あらすじ】

今までずっと一緒に戦ってきた『腕』と再び再開するため旅を続けている
無欲な青年、「火野 映司」が旅の途中でたどり着いたのは、魔法文化が発達した世界、「ミッドチルダ」だった。

そこで映司は「4人の守護騎士」と、
「夜天の主」に出会い、

とある事件に巻き込まれていく…。

『夜天の主と欲望の王』(前書き)

今回初めての小説の投稿です。

はつきりいつて文章力と国語力は0に等しいです。なるべく見てくださる皆様にわかってもらえるよう努力していきますのでよろしくお願いします。

あとスマホでの投稿なので途中 ん? となる

ことがあるかもしれません。

ご了承ください。

私の完全な自己満足な小説なので完成度はあまり期待しないでください。

あと小説を見て、気分が悪くなった方は閲覧をやめてください。文句、クレームも一切受け付けません。

「夜天の主と欲望の王」

暗い森の中、

少し変わった格好をした

20代ぐらいの青年が歩いていていた。

「???」はあ... はあ... 完全に迷ったなあ、携帯は繋がらないし、ここがどこなのかわからないし、はあ...」

その青年は旅をしている。

一緒に戦ってきたかけがえのない「腕」を探すために。

「???」... ま、まあなんとかなるでしょ、なんにも持ってないけど、明日の「パンツ」はちゃんとあるし！」

青年はまた再び歩き始めた。先の見えない旅の出口を目指して...

彼、青年の名は - 火野 映司 -

またの名を、 『仮面ライダーオーズ』

001話 世界の破壊者とパンツと異世界

映司「…結構歩いたなあ、でもいくら歩いても 木 ばっかりだなあ」

無欲な青年、火野 映司 は、いまだに森をさまよい歩き続けていた。

映司「おゝい、誰かあ！いませんかあゝ！？
助けてくださあゝい！！ ……いるわけないか、
…困ったな、お前だったらどうする？

…… - アンク -
」

映司はポケットから2つに割れた『メダル』を取りだし、悲しげな顔をしてそれを見つめる…。

映司「お前がいなくなってから、毎日が寂しいよ、アンク。いままでお前を復活させるため、いろいろな国を旅してきたけど何一つ手がかりがなかったよ…、なんかもう、やっぱり無理なのかな…」

その時、いきなり木から果物が落ちてきて、映司の頭に…、

- ゴンツ！ -

映司「…ツ！ ……いつてええエエエ！！」

見事 hit した。

映司「…ははッ！ そうだよな、俺、何弱気になってるんだろっ、ごめんアंक！まだ俺諦めないから！絶対お前を見つけれ出すから！」

映司は空に向かって叫びだした。

「必ず、お前を、見つけ出すからぁッ！！！」

叫び終わった後、映司は落ちてきて果物を手に取り、食べながら歩き出す。

映司「よし、頑張つてこの森から抜けだすぞ！次はこっちにいつて

『おい、オーズ…』

…ん？ だ、誰！？

どこからか、声が聞こえてきた。

「???」こっちだ、うしろだ。」

映司「うしろ？…あ！ あなたは！？」

そこに立っていたのは、

かつて「世界の破壊者」と言われた者、

『仮面ライダーディケイド』だった。

映司「お久しぶりです！ディケイドさん！
シヨッカーの件以来ですね」

ディケイド「ディケイド『さん』ってお前…

まったくお前を呼びに『この世界』に来てみれば、お前こんなところまで何してるんだ？」

映司「いや、旅してたら道に迷っちゃって、ははッ！、…ん？俺を呼びに来たってどういう意味なんですか？」

その場の空気が一気に変わった…。

デイケイド「いいか、よく聞けオーズ…、お前はこれからある世界に行ってもらう、そしてお前には『ある事件』を解決してもらう、悪いがこれは『オーズ』にしかできないことだ、だいたいわかったな？」

映司「『だいたいわかったな？』…って全然わからないですよ！一体なにがどうなってるんですか！？だいいち、俺はもうオーズには…」

デイケイド「よし、よくわかってくれた、この世界のためにせいぜい死なない程度に頑張ってきてくれ、じゃあな。」

突如、映司の前に灰色のオーロラのカーテンが現れ、迫ってくる！

映司「ちよつとお！全然話聞いてないじゃないですかぁ！ま、まっつて、あああああああああ……。」

映司は完全にこの世界から消え去った…。

デイケイド「すまない、オーズ…、さすがに無理矢理すぎたが、本当にお前にしかできないことなんだ…。

頼むぞ、『仮面ライダーオーズ』」

森には再び静寂になった…。

「……はやくん！！！」

「……ん？どないした？リン」

リン「空から、ぱ、ぱ……。」

はやく「ぱ？」

リン「パ、パンツが

落ちてきたんですう！！！！！」

はやく「……はい？」

映司「……つ痛てて、なにが起こったんだ？」

映司は辺りを見回す。そこは見たことのない建物の廃墟が一面に広がっていた。

映司「……え、え？ええええええ！！？」

-
-
-
-
物語は始まった。

002話 騎士とヤミーと復活のオース

時はさかのぼり、ミッドチルダ
機動6課隊舎

ブリーフィングルームにて会議が行われていた。

そこにいたのは

機動6課部隊長「八神はやて」

スターズ隊長「高町なのは」

ライトニング隊長

「フェイト・T・ハラオウン」

の、3人だった。

なのは「はやてちゃん、それで話って？」

はやて「えつとな、ついこの前の事なんやけども、ミッドチルダ市
街地で殺害事件があったんや。で、目撃者の話によると、『怪物に
襲われてた』っていう証言なんよ」

フェイト「でもミッドに『怪物』なんて…」

はやて「うん、一度も確認された事はないんよ、と、いうことは、
別の世界から来たとしか考えられへん。」

なのは「待って、でも、管理局のデータベースには…」

はやて「そう、そこや、なのはちゃん。時空管理局に引っかからず
にこのミッドチルダに次元移動なんてまず無理なんよ。と、いうこ

とは、最初からこの世界にいた、ということになるんよ」

フェイト「ッ！ そんな！？」

はやて「まあ、フェイトちゃんが驚くのも無理もないなあ、とにかく、

この事件は私とヴォルケンリッターが主体となって動きます。事によつてはフォワードと隊長陣も動くことになるかもしれないので頭に入れといてください。」

なのは「& a m p ; フェイト「了解！」

- 隊舎 廊下 -

なのは と はやてが歩きながら雑談していた。

なのは「それにしても大変だね、JS事件が片付いて一段落したと思つたら次から次へと事件が押し掛けてきて、

はやてちゃん、体大丈夫？」

はやて「なのはちゃんにそれ言われる日がくるとわなあ…。」

なのは「にやはは、でも例の事件、はやてちゃんとシグナムさん、それとヴィータちゃんにシャル先生とザフィーラさん達だけで動くってことでしょ？未確認の生物相手にたった数人でって、いくらなんでも危険なんじゃ…。」

はやて「大丈夫、心配あらへんよ」

はやては胸をはって言った。

はやて「なんてったって私は歩くロストロギア、『夜天の主』であの子達は私を守る守護騎士たちや、なんの問題なんてあらへん！」

なのは「そっか、わかった！でもくれぐれも無茶だけはしないでね。」

はやて「ありがとう、なのはちゃん。さて、そろそろあの子達にも説明しておかんと、

またね！なのはちゃん！」

なのは「じゃあね！はやてちゃん！」

それからしばらく時間がたち、はやての周りにはヴォルケンリッタ―全員が集められていた。

烈火の将 剣の騎士 シグナム

紅の鉄騎 鉄槌の騎士 ヴィータ

風の癒し手 湖の騎士 シヤマル

蒼き狼 鉄壁の守護獣 ザフィーラ

それと、今は亡き『祝福の風』の名を受け継ぐもの、
リインフォース？

はやて「…と、いうことなんや。皆、わかった？」

シグナム「主、はやて 確認されている怪物というのはその一体だけなのですか？」

はやて「せや、ただくれぐれも気を抜いちゃだめや、もしかしたら増援もあり得るからなあ」

ヴィータ「まあその怪物を取っ捕まえて全部吐かせりやそれで事件解決って事だな！」

シャル「こら、ヴィータちゃん。女の子がそんな汚い言葉遣いしちゃ駄目でしょー！」

ザフィーラ「シャル、突っ込むところが色々違うぞ。…主、基本はシャルと隊舎で待機という形で良いのだな？」

はやて「せや、基本は私とシグナムとヴィータが前線にでて、シャルとザフィーラは待機や、あーリンもな！」

リン「了解ですう！」

はやて「それじゃあ皆、気合いいれて、任務、開始！」

ヴォルケンス「了解！」

それからまた月日がたち、現在、シグナムとヴィータがパトロールをしていた。

ヴィータ「なあ、シグナム」

シグナム「なんだ、ヴィータ」

ヴィータ「こんなところに未確認なんか現れるのかよ」

シグナム「一樣確認だ、まあ人は住んでいないがな」

今パトロールしている場所はかつてジェイル・スカリエッティのガジェットローンと交戦があつた市街地である。今はとても人が住める場所ではない。

シグナム「前に報告があつた件以来、一度も事件が起きないのも奇妙だ。できれば機動6課が解隊になる前に解決したかったのだが」

ヴィータ「そつか、試験運用期間も残り数週間だもんな、あいつらもだいぶ成長し『ええええええええ！？』、な、シグナム！」

シグナム「悲鳴というより驚き声に聞こえたが、いくぞ！ヴィータ！」

二人は急いで悲鳴？が聞こえた現場に向かった。

その頃…

映司「ちよつと待てよ！ここどこ！？ま、待て、落ち着こう、そう
だ、落ち着いて、えつと…」

ヴィータ「なんだ、一般市民か、こんなところでなにしてんだ？」

タイミングよくヴィータが空から降りてきた。

映司「あああああ！！！！コスプレした女の子が空から降りてきたあ
あ！！！！！！！！！！」

ヴィータ「な！？コスプレじゃねえ！これは　はやてが作ってくれ
た……」

映司「あああああ！！！！お巡りさん！！お巡りさん！！！！後藤さああ
あん！！！！！！！！！！」

ヴィータ「おい！話を聞きやがれ！！殺すぞ！！！！」

シグナム「何をしている！？お前たち！」

思わずシグナムは突っ込んだ。

- 数十分後 -

シグナム「とりあえず落ち着いたか？青年」

映司「はい、すみません取り乱しちゃって、えっとあなたは？」

シグナム「私は、……ッ!？」

ガキインッ！！

その時、なんの前触れもなく報告にあった未確認生物が襲ってきた！
シグナムはギリギリのところでガードした。

シグナム「まったく…いきなりだな！」

ヴィータ「こいつが未確認か！おいそのへんな格好の男！死にたくなかったらはやく逃げろ！」

映司「へんな格好って…、ていうか！あれって…『ヤミー』！？」

そう、報告にあった未確認生物というのはまさに『ヤミー』の事であつた。

ヴィータがグラフアイゼンを構えて戦闘体制を整えていると…

「???」どこを見ている！

ヴィータ「ツな!？」

ガキーン！

なんともう一体のヤミーも現れた！

ヴィータ「おい！もう一体なんて聞いてないぞ!？」

シグナム「くそツ！思っていた以上につよい、このまま長期戦に『よこせ…』ッ!？」

ヤミー『お前達の強さを、よこせ!』

映司「このままじゃまずい！でもどうすれば！？」

その時、映司のポケットに違和感があった。

映司「な、もしかして？」

ポケットを探ると、そこには

黄色のメダルと、緑のメダルと、

- - - 割れたはずのタカメダルがあった。

映司「なんで！？どうして…」

だがその時ヴィータと交戦していたヤミーが映司に襲いかかった！

ヴィータ「な！しまっ…」

ヤミー『よこせエエエ！！！！！！』

映司「ッ！！！！」

映司はギリギリのところで交わし…

シグナム「貴様なにしてる！？はやく逃げ…」

オーズドライバーを腰に巻き付けメダルをセットし…

ヴィータ「ッ！？」

メダルをスキャンする！！

映司「変身ッ!!」

『タカ!

トラ!

バッタ!

タ・ト・バ!

タトバ! タッ! トッ! バッ!!』

シグナム「な、なんだあれは…!?!」

ヤミー『オーズ…オーズウッ!!!』

今、ミッドチルダに

『仮面ライダーオーズ』が復活した。

003話 謎の声と機動6課と新たなグリード

ヴィータ「なんだ？一体何が起きてるんだ！？」

ヴィータが驚いているのも無理もない。

なにせいきなり未確認が現れて、戦闘になり、もう一体未確認が現れ、

自分を小馬鹿にした（と思っている）変な格好をした青年が変な歌を流して上下三色の怪人？になったからである。

これにはさすがにシグナムも驚きを隠しきれない。

オーズ「変身できた…！よし、いくぞ！」

オーズはトラクロールを展開して…

ジャキインツ！

ヤミー『グアアッ！』

ヤミーのお腹を切り裂いて、断末魔をあげ

その場に転がり回った！

お腹からセルメダルが大量にでてきた！

オーズ「やっぱり、こいつらヤミーだ！でもなんで？グリードなら全員…」

ヤミー『なによそ見してやがる！』

倒れたヤミーが再び襲いかかって、

ドゴォ！

オーズ「うわぁッ！！」

不意打ちをくらい、トラアームのパワーが
出せなくなってしまった。

オーズ「うわぁ！トラメダルさんごめんなさい！ど、どうすれば！
？」

その時、どこからか…

『…いじ、映司！これ使え！！』

オーズ「い、今の声、どこかで…っ痛た！」

空から突然『ゴリラメダル』が降ってきた。

オーズ「ゴリラのメダル！？さっきからわけわかんない事ばっかだ
けど、これなら！」

オーズは中央のメダルを変えて、再びオースキャナーでスキャンする！

『タカ！ ゴリラ！ バッタ！』

オーズはタトバコンボからタカゴリバへ
亜種チェンジをした。

ヴィータ「腕の形状が変わった！？」

ヤミー『くそ！なぜこの世界にオーズがあ！？』

オーズ「はああ！セイヤー！！」

オーズはゴリバゴーンを射出し…

ヤミー『ゲワアアアッ！！！！！！！！』
ドゴオンッ！！

ゴリバゴーンに当たったヤミーはその場で爆発し、大量のセルメダルを撒き散らした。

その頃シグナムは…

シグナム「ふつ、最初はどうかと思ったが、なんだ、攻撃もワンパターンで力だけではないか」

ヤミー『この女、強い！その力、欲しい！！！！』

シグナム「終わらせてやる、レヴァンティン！ロードカートリッジ
！！」

ガシャコンッ！！

ヤミー『な、なにに！？』

シグナム「紫電…一閃！！！」

ヤミー『グワアアッ！！！』

ドゴオンッ！！！！

ヤミーはシグナムの一撃により、爆発し、大量のセルメダルを撒き散らした。

シグナム「なんだこれは？コイン？、いや、メダルか？」

とりあえず一段落し、シグナムはオーズとヴィータに合流した。

ヴィータ「おい！！…えつと、タトバ！！」

オーズ「違うよッ！！この姿は『オーズ』っていうんだ。」

ヴィータ「じゃあさっきのタトバの歌はなんだ？自分の名前を歌ってたんじゃないのか！？」

オーズ「歌は気にしないでいいよ！」

ヴィータ「気にならないほうがおかしいだろうが!!」

シグナム「いい加減にしろ!ヴィータ!!」
ポカッ!

ヴィータ「いつてエ…グスッ」

シグナム「うちのヴィータがすまなかった、とりあえず、なんだ、それを脱いでくれぬか?」

オーズ「ああ、そうですね、わかりました!」

オーズは変身を解除し、人間の姿になった。

シグナム「色々と質問したいのだが、まずお互いの自己紹介から始めよう、私の名は『シグナム』古代遺物管理部機動6課ライトニング分隊の副隊長だ」

映司「俺は『火野 映司』っています!それでさっきの姿は『オーズ』っていう、えっと、正義の味方ってやつかな?」

シグナム「『火野 映司』か、さっきは助かった、礼を言っぞ、火野」

映司「いえいえ、こちらこそ…『おいッ』ッ!?!」

ヴィータ「さっきからシカトしてんじゃねえ!私には聞かないのか!?!」

映司「ああ、ごめん!えっと、お名前はなんていうんだい?」

ヴィータ「私はヴィータ、機動6課スターズ分隊の副隊長だ。」

映司「ヴィータちゃんかぁ、かわいいお名前だね」

ヴィータ「お前絶対子供扱いしてんだろ！」

シグナム「まあ落ち着け、ヴィータ。…火野、いきなりで悪いが色々と聞きたいことがある、私達の隊舎までついてきてくれないか？」

映司「はい、いいですよ。もともといく宛もないし、俺が今、どこにいるかさえもわからないし…」

シグナム「すまない、今すぐ迎えのヘリを呼ぶ」

映司（それにしてもさっきの声、いったい…）

・ヘリコプター内・

ヴィータ「映司」

映司「なに？ヴィータちゃん」

ヴィータ「お前は私が殺す」

映司「ッなんで!？」

シグナム（こいつら、見てて飽きないな…）

- 機動6課 部隊長室 -

一人、落ち着かない人間がいた。

はやて「……………」

リン「はやてちゃん、さっきからペンで机叩くのうるさいですう」

はやて「だってなあ…、リン、さっきヴィータから連絡あったんやけどなあ、『未確認二匹で、変な格好したやつも現れて、タトバ歌ってセイヤーして片付いたから映司つれてそっち帰るぞ!』って…状況わかる?リン？」

リン「ヴィ、ヴィータちゃんには、なにも悪気はないんですよ!」

はやて「まあその『映司』って人も気になるなあ、もしかしたら未確認についてなにか知ってるかもしれんな」

リン「あ、着いたみたいですよ!」

ヴィーン

ドアが開く。

シグナム「主、はやて、ただいま戻りました」

ヴィータ「はやて、もどつたぜえ！」

映司「こ、こんにちわ」

はやて「ほな、お疲れさんな。…あなたが映司さん？」

映司「は、はい！火野 映司です！」

はやて「そんな硬くなんなくてええよ、私の名前は『八神 はやて
よろしくな、映司くん！』」

映司「そうだね…、よろしく！はやてちゃん！」

それから小一時間、お互いのこと、世界の情勢のこと、オーズのこ
と、魔法文化のことなど話合った。

映司「知らなかったなあ、本当に魔法があるなんて！はやてちゃん
なんか魔法みせてよ！」

はやて「多分映司くんの想像してる魔法とはかなり違うとおもうわ
…てか、映司くんのその『オーズドライバー』ってデバイスとはま
た違うんか？」

映司「うーん…近くて、遠いのかなあ？」

そんな話もしつつ、

はやて「あ、忘れてたわ！映司くん、あの未確認生物についてなに

か知つとることある？」

映司「えつとね…、簡単に説明するよ」

その場の空気が重くなりつつ、映司は口を開いた。

映司「あれは、『ヤミー』っていう、人の『欲望』をエサにする怪物なんだ。」

はやて「欲望？」

映司「うん、いっぱい食べたいとか、お金持ちになりたいとか、綺麗になりたいとか、そんな人の欲望をエサにするんだ」

シグナム「つまり、ヤミーが生きていくには人の欲望が不可欠、ということ、その親は人間ということなのか？」

映司「察しが良いですね、シグナムさん、その通りです。」

はやて「でも、そのヤミーってどうやって生まれるん？」

映司「大事なのはそこなんだ、はやてちゃん。そのヤミーを生み出す上位に位置する者がいるんだ、それが、『グリード』」

はやて「グリード…」

ヴィータ「つまりその『グリード』がいるかぎりヤミーは生まれ続けるってことか」

映司「でも、おかしいんだ、グリードはもう全員消滅したはずなんだ」

はやて「てことは、映司くんも知らないグリードがこのミッドチルダに存在してるってことか、はあ、一件落着と思っただけ、そういうわけにもいかないようやなあ」

映司（俺の知らないグリード…、ディケイドさん、これが俺がこのミッドチルダでやらなければいけない問題なんですか？）

- とある洞窟にて -

「???」あれぐらいの人間の欲望では、まだこの程度のヤミーしか生まれないか、まあいい、まさかオーズがこの世界にやってくるとはなあ、おもしろい」

「???」は洞窟をでて、空を見上げる。

「???」邪魔はさせんぞ、オーズ。俺は必ずこのミッドチルダでやってやる!!!

世界の、終焉をッ!!!!!!」

ついに謎のグリードが動きだす…。

004話 隊長陣とフォワードと新たなヤミー

ヤミーとグリードについて話会った後、

はやて「と、いうことで、グリードを退治するまで映司くんを民間協力者っていう立ち位置になるんやけど、ホントにええんか？」

映司「うん、もともとグリード退治は俺の分野だからね、それに人は助け合いする生き物でしょ！」

はやて「うん、ありがとうな、映司くん！そうや！せっかくだから映司くんにうちの部隊のメンバー紹介するわ！」

ちょうど昼ごろだったため、食堂に皆集まっていた。

はやて「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

なのは「あ、はやてちゃん！お疲れ様！」

フェイト「はやて、そちらの方は？」

はやて「紹介するわ、この人は『火野 映司』くんや、私となのはちゃんと同じ地球出身や！」

映司はなのはに頭を下げる。

映司「どうも、はじめまして、『火野 映司』です！よろしく、なのはちゃん！」

なのは「よろしくね、映司くん！」

そして、フェイトにも頭を下げようとするが……

映司「あ、ああ……」

フェイト「ど、どうしたのかな？映司？」

はやて「ん？えーじく？ん？」

映司（な、なんだこの胸の痛み！？た、たしか前にもこんな事あったような！？フエ、フェイトさん、すごく美人だな、だ、駄目だ、ま、まともに話せない！！久しぶりの『ラブッ！ラブッ！ラブッ！ラブッ！ラブッ！』）

今、映司の心の中で、『ラブラブラブコンボ』にコンボチェンジした。

はやて「あ、駄目や、完全にフェイトちゃんに目えいつとる」

「フェイト？」

映司「あ、え、映司でし！よろしくお願いします！フェイトさん！」

年下なのになぜか敬語になつてしまふ映司だった。

そして、次のテーブルに向かうとなのは達より更に若い四人が座っていた。

その中の内、青いショートヘアの女の子がいきなり映司に話しかけてきた。

スバル「こんにちわ、映司さん！さっき部長室通りすぎるとき、全部映司さんのこと聞いていました！変わったデバイス持つてるんですって！？ぜひ、今、機動させて…『ポカッ！』…痛て、なにすんの～ティア～」

ティアナ「なに盗み聞きしたこと普通に話しちゃってんのよ！バカスバル！！…すいません、映司さん、怒ってません？」

映司「大丈夫だよ、スバルちゃんにティアちゃん、こんど機会あったら見せてあげるから、ね？」

スバル「ホントですか！？やったあ！！！！！！」

ティアナ「全く、救いようのないバカね…」

エリオ「ついに、ついにまともな男の人が身近に…」

キャラ「良かったね！エリオくん！」

…映司はエリオとキャロの二人を見ながらふと思った。いくら成人年齢が低いとはいえ、

子供が前線に立って戦うことにはあまりいい気はしなかった。

映司（この子達は自分の意志で戦っている、俺がなにかしても恐らくこの子達の考えは変わらないだろうな、でも、あんまりいい気はしないかな）

映司「エリオくんにキャロちゃんだね、よろしく！」

エリオ&キャロ「はい！」

はやて「それと、映司くんにはまだ紹介してなかったけど、ヴォルケンリッターにはまだあと二人いるんよ」

映司ははやてと一緒に医務室に寄った。

シャル「あら、はやてちゃん！それに、あなたが映司くんね」

映司「はい、これから少しの間、よろしくお願いします！…えっとザフィーラさんも、よろしくお願いします！」

ザフィーラ「……………」

シャル「ザフィーラはちょっと人見知りだからねえ、ごめんなさい！…でも大丈夫！すぐ仲良くなれるわ！」

映司「はい！」

そして一段落したころ…

- 隊舎 廊下 -

はやて「そういえば映司くん、なにか生活に必要なものあるか？」

映司「大丈夫！俺はちよつとの小銭と明日のば………ない」

はやて「？」

映司「ない、ない！ない！！」

はやて「どないした？映司くん！？」

映司「明日のパンツがないいい！！！！！！！！！！」

映司はフェイトの時以上にものすごくテンパっていた。

はやて「明日のパンツって…あ！もしかしてこれか！？」

それは、今朝リンが拾ってくれた映司のパンツだった。

はやて（てか、これ映司くんのパンツやったんか）「『あ、あ、
…ん？』」

映司「ありがとおお……！！！！！！！！！！」

「ヤミー、よこせ、お前の力、よこせエ……！」

市民「あ、あ、あ、ああああッ……！！！！！！！！……」

また、あらたな事件が起こっていた…。

004話 隊長陣とフォワードと新たなヤミィ（後書き）

うん、パンツのくだりとフェイトのくだりは蛇足だったかなあゝ
…。

005話 搜索と共闘と変形自販機

映司は機動6課に居候することになった。

次の日の早朝…

ティアナ「さて、今日の朝練もはりきっていか…って…え、映司さん？なにしてるんですか？」

映司「あ、ティアちゃん、おはよう！」

そこにいたのは、掃除婦の格好をして掃除をしている映司だった。

ティア「別に民間協力者だからそこまでしなくても…」

映司「でも、だからって何もしないわけにはいかないし、それに俺はこういう仕事好きだから！」

ティア（映司さんってホントにお人好しのね。）

それから少し時間がたち、ちょうど朝食の時間になった頃、映司はフォワード達と朝食をとっていた時、シグナムが深刻な顔をして話しかけてきた。

シグナム「火野、食事中悪いが、ちょっとブリーフィングルームまで来てくれないか？」

映司「え？はい、（もしかしてまたヤミー？）」

・ブリーフィングルーム・

そこには はやて とヴォルケンリッター達が集合していた。

はやて「すまん、映司くん、まあだいたい状況はわかるやろ」

映司「うん、またヤミーが現れたんだね」

はやて「せや、今日の朝方、管理局地上本部付近にて、Aランク魔導師一人の死体が発見された。死体の状況から見て、間違いなくヤミーの仕業や」

ヴィータ「死亡推定時刻はだいたい昨日の夜つてとこだな」

シャマル「Aランク魔導師がやられたってことは…」

ザフィーラ「ああ、この前よりパワーが上がってるヤミーということだな」

シグナム「だが、ヤミーの動きがまったく掴めんな、一体何が目的なんだ？」

映司「うーん…、っ！リンちゃん！！」

映司が突然大声をだし、周りは驚いた。

リン「な、なんですか？」

映司「今まで襲われた人達の職種ってわかる!？」

リイン「えっと…、全員管理局の職員です!」

映司「たしか魔導師には『ランク』ってのがあるんだよね!？皆のランクは!？」

リイン「えっとですね…、これって…ッ!」

はやて「なんや、リイン!？」

リイン「皆、Aランク以上です!」

シグナム「そうか、ヤミーが狙っているのは魔導師ランクが高い職員を狙っているのか!」

ヴィータ「あの時のヤミーは『力よこせ』って言っていたけど、また同じ人間のヤミーってことか？何匹連れてるんだ？」

はやて「なるほどなあ、せやけど次襲われるAランク魔導師なんて特定できんなあ、いっぱいおるし…」

映司「大丈夫だよ、はやてちゃん!」

映司は確信のついた表情で、再びリインに質問した。

映司「最近地上本部で、急激にランクが上がっている、魔導師っていない!？」

リインはパソコンで調べると…

リン「いました！ついこの前までCランクだった魔導師が、A+まで上がってます！！これは…地上本部の警備員です！！」

ヴィータ「間違いない！そいつがヤミーの親だ！」

はやて「まさに『灯台もと暗し』か…、よし！今回はヴィータと私と映司くんの3人で出撃します！シグナムとシャルとザフィーラは待機や！」

全員「了解！」

・時空管理局地上本部 地下駐車場・

そこに、一人でブツブツ喋りながら循環警備をしている警備員がいた。

警備員「ははは、最初あの化け物を使って人殺してしまった時は恐ろしすぎて、数ヶ月は使う事できなかったが、慣れてしまえば、なんとも思わないな！もう少しで、もう少しで直属の局員になれる…ッ！…そうだ…別に俺が殺してる訳じゃない…全部あの化け物がやった事なんだ！俺は誰も殺してなんかない！！！！はっはッは！！！！」

はやて「いや、あんたが殺したんや」

警備員「だ、誰だッ!？」

警備員が後ろを振り向くと、

そこには、はやて とヴィータと

映司が立っていた!

はやて「遂に見つけたで!連続殺人事件の容疑者として、あんたを逮捕します!」

はやての関西混じりの声が、その場に響きわたった!

警備員「俺が殺人?ははッ!殺したのは俺じゃない!あの化け物だ!」

ヴィータ「ふざけんじゃねえ!お前の欲望が、何も罪のない魔導師を殺したんだ!」

警備員「さっきからゴチャゴチャと!おい、化け物!出てこい!」

シュタツ!

その場にいきなりヤミーが現れた!

警備員「化け物!そいつらをやっちまえ!」

ヤミーが戦闘体制に入る!

映司「やっぱり、こういう展開になるんだね」

はやて「ヴィータ、映司くん、いくでえッ！」

ヴィータ「おう！はやて！」

映司「うん！」

映司はオーズドライバーを腰に巻き付け、
メダルをセツトし、はやて とヴィータは
デバイスを取り出す！

はやて・ヴィータ「セツト、アップ！！！」
映司「変身ッ！！！」

『standby Ready』
『タカ！　トラ！　バッタ！
タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

はやて とヴィータは騎手甲冑を身に付け、
映司はオーズへと変身した。

オーズ「いくぞ！ハッ！セイヤッ！」

オーズはヤミーにトラクローで引き裂き、
ヤミーが苦しんだところに…

ヴィータ「はああッ！」

ドゴオオッ！

ヴィータのグラーファイゼンがヒットする！

ヤミー『グアアアッ！！』

オーズ（すごいな、パワーだったらゴリラアームぐらいあるな…）

ズガガガガッ！

そこから はやて の複数の魔法弾がヤミーに当たる！

はやて「どや？なのはちゃんお得意の『アクセル・シューター』の威力は！？」

オーズ「凄いよ、はやてちゃん！よし、俺も負けてられないな！」

オーズはバツタレグでヤミーを複数回蹴りつける！

ドゴオオッ！

ヤミー『ガアアッ！』

ヴィータ「これでお前も、おしまいだな！警備員！！」

警備員「く、くそお！おい、化け物！何をしてでも奴らを殺せ！」

その時、ヤミーの動きが止まる。

ヤミー『なにをしても…いいんだな？』

警備員「ああ！とにかく奴らを殺すんだあ！」

ヤミー『それでは…』

ヤミーが警備員に寄り…

オーズ「…ッな！？」

ヤミー『お前の力を、よこせ！！！』

ヤミーは警備員を補食し始める…

警備員「や、やめろおッ！お、俺は…ただ、魔導師に、なり、たく
…ギアアアッ！！！」

バキバキ、ゴキ…

ヤミー『ぶっ、しごちそうだな』

はやて「自分の親を…これがヤミー!!!」

ヴィータ「許せねえ!!!くらえ!!!」

ヴィータが再びグラーファイゼンで殴りかかるが…

ガシッ!

ヴィータ「なにッ!うわぁッ!」

ヤミーは前よりパワーアップし、グラーファイゼンを受け止め、ヴィータは自分に叩きつけられた。

はやて「ヴィータ!!!」

『タカ!　ゴリラ!　バッタ!』

オーズ「うぉおッ!」

オーズはタカゴリバに亜種チェンジし、ヤミーに殴りかかるが…

ヤミー『ふん、効かな…』

オーズ「うそ!?ぐわぁッ!」

オーズはヤミーに投げ飛ばされ、壁に叩きつけられた。

ヤミー『ここじゃ流石にキツイ、場所を変えよう。』

そう言って、ヤミーは外に飛び出していった。

はやて「まで！逃がせへん！」

ヴィータ「くそ、待ちやがれ！」

二人は飛行魔法を使い、飛び出していくが、

オーズ「わああッ！？ちよつと皆まってえー！」

オーズはただ1人走って追いかけていた。

オーズ「はあ…、はあ…、チーターのメダルかクジャクのメダルあればいいんだけどなあ」

しかし走っていると、駐車場の入口付近に…

オーズ「はあ…、…ん？、ッあああッ！…！」

なんとそこには、あの自販機、『ライドベンダー』があつた…！！

オーズ「なんでミッドチルダに！？もしかしてディケイドさんかな！？まあいいや！使わしていただきます！」

セルメダルを投入し、真ん中のスイッチを押して、バイクモードに変形させた！

オーズ「よし、決着を着けてやる！」

オーズはアクセルを握り、猛スピードをだして、ヤミィを追いかけていった…。

006話 決着と解決と消えない欲望

ヤミーは地上本部から少し離れた海岸沿いにいた。

それを追いかけてきた はやて とヴィータも今、到着した。

はやて「さあ、いくでえ、ヤミー！」

ヤミー『ふん！お前みたいな小娘に、なにが…』
ドゴオオオンッ！！！

しかし次の瞬間！高濃度の魔力砲がヤミーに直撃した！！

ヤミー『グワアアアッ！！！…こ、小娘えええ！！！…』

はやて「私はな、この世界ではちよつとは名の知れた魔導師なんよ！さあ、どんどんいくでえ！！！」

はやて は、シュベルトクロイツに魔力を収束する！！！！

キイイイイインッ！！

ヴィータ「はやて！その技って！！」

はやて「デイバイインッ！！」

ヤミー『ッ！？』

シュベルトクロイツから収束砲が発射される！！

はやて「バスターアアツ！！！！」

ドゴオオオオンツツ！！！！

ヤミー『ギヤアアアアアアツツ……！！！！！！！！』

ヤミーは数十メートル吹っ飛んだ！

ヴィータ「すげえや！はやて！ヤミーを吹っ飛ばした！！」

はやて「よし、これで少しは…『ズバツ！』ツ！？」

次の瞬間、ヤミーがはやての左手を爪で引っ掻いていた。

はやて「くッ！うう…」

ヴィータ「はやて！」

だがヤミーも虫の息だった。

ヤミー『はあ…、はあ…、流石にさっきのは効いたぞ、小娘、ぶっ殺してやる！』

ヴィータ（くそ、いざとなったら本気で…ッ！？）

ヴォオオオオン！

遠くからバイクの音が響き、

『タカ！　トラ！　バツタ！
タツ！トツ！バツ！タトバ！タツ！トツ！バツ！』

やって来たのは再びタトバコンボにコンボチェンジしたオーズだった！

ヤミー『グワアアッ！』

オーズはライドベンダーでヤミーに体当たりし、そのまま　はやてとヴィータのもとへ向かった。

オーズ「はあゝやっと追い付いた、って、はやてちゃん！大丈夫！？」

はやて「うん、大丈夫、問題あらへ…ツク！」

左手からは血が流れ続けていた。

ヴィータ「まってる！はやて！今シャマルを呼ぶから！」

オーズ「大丈夫、落ち着いて、はやてちゃん、ヴィータちゃん、二人とも俺が絶対守るから！」

オーズは再びライドベンダーに乗り、ヤミーに突っ込んでいく！

はやて・ヴィータ「映司^{くん}…」

ヤミー『くそおおッ！オーズウウッ！！』

オーズ「くらえええッ！！！」

オーズはライドベンダーを飛び降りそのままヤミーにぶつける。

ヤミー「はぁ…はぁ…くそおおッ！！！！！！！」

そしてオーズはオースキャナーで、再スキャンする！

「スキヤニングチャージ！！！！！」

オーズ「はぁアアアアアッ！！！」

ヤミー「ッ！？！」

オーズの「タトバキック」が炸裂する！

オーズ「セイヤアアアアアッ！！！！！！！」

ヤミー「グワアアアアアッ！！！！！」

ドゴオオオオンッ！！！！

ヤミーは大爆発し、大量のセルメダルが飛び散る！

オーズ「はぁ…はぁ…は、始めてこの技きまったかも…」

数時間後…

その後、管理局局員が集まり、事件の後始末をしていた。はやてはシャマルにより治癒魔法をかけられており、ヴィータと映司は夕陽が映る海辺を歩いていた。

ヴィータ「なあ、映司」

映司「ん？何？」

ヴィータ「映司は、こんな事件沢山みてきたのか？」

映司「…うん、数え切れないほど、ね」

ヴィータ「欲望って、無くならないもんなのかなあ…」

映司「残念だけど、それは無理なんだよ、欲望っていうのは生きる者全てに存在するからね、…でも欲望があることは悪いことばかりじゃないんだよ」

ヴィータ「？」

映司「人は欲望によって成長したり、学習したりしていける生き者なんだ、そこから過ちに気付くこともできるし、生き甲斐を見つけ出すことだってできる」

ヴィータ「…そっか、お前もたまには良いこと言っじゃねえか！」

映司「ちよつとお！それどういう意味なんだよ！？」

ヴィータ「さ、はやく はやてのどこ、帰ろうぜ！！」

映司「うん、そうだね！行こう！ヴィータちゃん！」

ヴィータ「だから、ヴィータ『ちゃん』はよせ！」

映司とヴィータは治癒を受けている はやて のもとへと帰っていた…。

006話 決着と解決と消えない欲望（後書き）

とりあえず一段落、最後うまくかけなかったなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7376z/>

ooo after ~ 夜天の主と欲望の王 ~

2011年12月25日16時49分発行